

アニメとマンガの強い連携は日本の大きな強みとの指摘も 知的財産権に関する研究発表会で コンテンツ産業推進への意見飛び交う

日本知財学会は7月10日と11日の両日、東京・青山学院大学にて

年次学術研究発表会を開催した。基調講演では青学大常務理事の半田正夫氏が、著作権法の問題点に言及。デジタル時代の到来に伴い13回の手直しを加えてきた著作権法には歪みが生じており、立法趣旨から見直しが必要と指摘した。

メインセッションではコンテンツと知財政策に関するシンポジウムが開催され、音楽制作者団体やレコード会社の代表らが参加した。音楽制作者連盟の上出卓氏は、iTunesが成功するなどコンテンツへのニーズは高まっていると指摘。産業界が意思をもって、より付加価値の高いコンテンツを作

つていく必要があると強調した。

経済産業省メディアコンテンツ課の青崎智行氏は、ゲームやアニメなどのコンテンツ市場で日本のシェアが高いことを示したうえで、国際展開に積極的な韓国や台湾の現状を報告し、危機感を促した。

コムピアミュージックエンタテインメントの廣瀬禎彦CEOは、「CDも安ければ誰もコピーしない」との持論を語り、旧態依然とした業界に警鐘を鳴らした。また、ユーザーにも「目利き」が増えてほしいとの希望を口にした。

今後の展望については、法律家を含めた人材育成の重要性や、作り手と受け手をつなぐ中間業者の意識改革について指摘がなされた。



▲上出氏、青崎氏、司会の中村氏、廣瀬氏、CANVASの石戸氏（左から）が参加。設問に○×で答える場面も。



▲司会を務めた中村伊知哉氏は国際IT財団の専務理事。デジタル関連の著作も多い。